

図書館と地域活性化—その可能性と課題

アカデミック・リソース・ガイド株式会社(ARIG)

代表取締役／プロデューサー 岡本 真



「地域活性化」の起爆剤としての図書館政策の登場

2010年代の顕著な傾向として、図書館を「地域活性化」や「まちづくり」の起爆剤のように位置づける意識が広がり、実際にそのような政策が各地で展開されている。弊社では全自治体の図書館整備状況を把握しているのだが、新たな図書館の整備や既存の図書館の更新を図っている自治体は300を数える。もちろん、このすべてが「地域活性化」を主眼に図書館の整備や更新を行っているわけではない。中にはあくまで公共インフラの更新の一環として、あるいは社会教育や生涯学習の充実を目的とする事業も少なくない。

むしろ、これらの文教政策としての図書館整備に加えて、地域活性化のまちづくり政策としての図書館整備が登場してきたと言う方が正確だろう。なお、政策的な背景として、中心市街地活性化基本計画や立地適正化計画のような都市計画関連の施策があることも見逃せない。実際、これらの計画の一環として図書館整

備を推進している自治体も少なくない。実際に各地を見渡すと、実に多くの図書館整備が行われていることがわかる。たとえば、代表的な例として、機能融合を図った複合施設である塩尻市立図書館／えんぱーく(長野県、2010年)、庁舎に移転・開館した滝川市立図書館(北海道、2011年)、熊本駅前の再開発と連動した、くまもと森都心プラザ図書館(熊本県、2011年)、図書館、美術館、銀行という異色の複合施設であるTOYAMAキラリ(富山県、2015年)、図書館を中核とした大和市文化創造拠点シリウス(神奈川県、2016年)、駅前の複合商業施設に設けられた、あかし市民図書館(兵庫県、2017年)等がある。これらの事例は挙げだしたらキリがないほどだ。

「地域活性化」×「図書館」の危うさ

さて「地域活性化」という言葉には常に、それは結局何なのか?という疑問が投げかけられる。字義通りにとらえるなら、「地域」を「活性化」することであ

るわけだが、では「活性化」した状態とは何を指すのだろうか。大規模な集客の実現なのだろうか。移住・定住の確保なのだろうか。経済活動の発展なのだろうか。この曖昧さは「地域活性化」に常に伴っており、時には「地域活性化」という言葉が胡散臭さを感じさせる一因にもなっていることには注意したい。

では、にぎわいのある図書館が生まれることは「地域活性化」と言えるのだろうか。昨今の風潮を見ると、危うさを感じないわけにはいかない。来館者100万人といった数字をやたらと強調し、「日本一」という掛け声を勇ましく喧伝している自治体も散見される。しかし、ここは冷静になりたい。図書館の来館者が100万人であることはいい。だが、その100万人は本当に地域を活性化しているのだろうか。あるいは仮に100万人が来館したとしても、そもそもその成果は整備だけでも数十億円を投じたコストに見合っているのだろうか(なお、開館後の約50年で整備費の4〜5倍の維持管理費が必要となる)。